

平和憲法の危機に直面して

## ゆきゆきて止まらざる心がりんりんと高鳴る

実盛 和子

ただいま総選挙の真最中である。1分1秒を争う煩瑣のなかにいる。あと1週間すれば審判はくだる。この原稿を書いているいまも背筋の寒くなるような不安と焦燥のなかに身を置きながら、期待に胸を震わせながら、ゆきゆきて止まらざる心がりんりんと高鳴る。

今度の選挙をどう闘い、情勢を有利に転換させるか。毎日毎日が研ぎ澄まされた刃の上を渡るような緊張で日を送っている。争点は明らかだ。迷いはない。ただ行動あるのみ。

わたしの武器は練りに練って作り上げられた憲法問題特集のビラ。今日は娘と中学2年生と小学5年生の男の孫。それにわたしを加えて4人づれで二つの集落へゆき、約200枚のビラを配った。空はうららかに晴れ気温22度、歩くと汗ばむほどの陽気だ。田舎の道は家から家までの距離が長いので時間がかかる。もうお昼はとくに過ぎていくのにまだ終わらない。2人の孫はビラを持って田舎道を走り、しっかりとポストのなかに収めて、意気揚々とまた走って帰る。わたしはふと涙ぐましい気分になった。

「このビラはあんたらが大きくなって戦争にゆくことのないように、憲法を大切にというビラよ。しっかり配ろうな」。

母親であるわたしの娘が言い聞かせ、納得させての上の行動であるらしい。消費税反対ビラもそうだった。下の孫は買い物をするのが好きなので、母親から金をあずかって買い物にゆく。だから消費税の痛みは身を持って知っている。

「消費税10パーセント増えたい反対。だからビラを配る」と言っただそつだ。子どもは直接的に反応するものだと思改めて感心しながら

「よし、帰りは婆ちゃんか奢る。食事にゆこう」と見栄を切ってしまった。ばば馬鹿と笑えば笑え。

わたしはこの子らをほめてやりたいのだ。山陽町のシヨツピングセンターの食堂で思い思いの肉料理を食べている孫たちの顔を見ているとまたしても胸が熱くなる。この子たちの未来についての不安がふと胸をよぎる。それは自分の少女期の忌まわしい戦時下のイメージと重なるからだ。

昭和12年7月から昭和20年8月15日の敗戦の日まで、満9歳から17歳まで、わたしの青春は丸ごと戦時下だった。極端な窮乏生活を強いられ、家族そろって食堂で会食なんてしたこともない。家が農家なので、物心がついたときから田圃で育った。母が麦畑の草取りをする傍らでまだ学齢にも達していないわたしは母の真似をして、同じように麦の畦間にしゃがんで草を抜いていた。かすかに残る記憶を辿れば、それは幼いわたしが母と接触できる唯一の場所だったような気がする。

着るものも食べるものも不自由な戦時下の生活のなかで、松根掘りの奉仕作業に動員されて背骨を痛めカリエスで寝たきりの父を介護し、一町歩の耕作をする母との接触はいつも農作業のなかだった。信心深い母はものを粗末にせず、人には優しく、実意を込めて丁寧に接した。古い日本の伝統と文化をまもり、常に相手の立場を優先する母の背中を見ながら育ったことに、わたしは感謝している。母の何分の一にも足りないが、わたしが娘に残してやるものは平和だろーと思っている。戦争のない、ほんのささやかな庶民の暮らしが脅かされることのないように、常に考え学習し行動してきた。誰からも要請されていない行動だった。いま娘は母になり、今度は自分の子らにそれを伝えようとしている。ビラ配りは、働いている彼女にとって、親子がふれあう貴重な時間にもなっているようだ。前途は多難で厳しい道かもしれないが、いまわたしは人生のなかで一番輝いている。(033、11、3記)

『岡山』の記憶

第6号、2004年、103頁